

張愛玲「沈香屑 第一炉香」再読

蟹 江 静 夫

1 はじめに

「沈香屑 第一炉香」¹は張愛玲の実質上の文壇デビュー作となった短編小説である。本作品は、はじめ雑誌『紫羅蘭』第2期（1943年5月）、第3期（同6月）、第4期（同7月）の3回に分けて連載され、のち小説集『伝奇』（雑誌社、1944年8月。増訂本、上海山河図書公司、1946年11月）に収録された。

連載が始まったとき、『紫羅蘭』の編者周瘦鵬は「沈香屑 第一炉香」、「沈香屑 第二炉香」について「その風格はイギリスの名作家サマセット・モームのようで、また『紅樓夢』の影響も少しある」²と書いているが、具体的に作品のどんな点がモームの作品に似ているか、『紅樓夢』の影響が認められるかについては言及していない。

本作品の先行研究では、主人公の葛薇龍の生き方を「墮落」と断ずる傾向がある。³葛薇龍を「墮落」した女性とするのは、派手な生活から抜けられなくなってしまったこと、結末でジョージ・喬と梁輿様のために売春することなどが原因である。しかし、こうした評価は作品を皮相的に捉えており、作品の魅力をそぎ取ってしまっているように思われる。

フェミニズムの視点から葛薇龍の生き方を「父権制に対する反逆・復讐」と見なす研究もあるが⁴、はたしてそこまで言い切ることができるのかどうか。筆者にはいまひとつ首肯し難いものがある。

また、葛薇龍の生き方を「絶望に陥った」とする研究もある。⁵たしかに先の見えない生き方ではあるが、それを「絶望」と決めつけてしまうことができるのだろうか。

本稿では、葛薇龍がほかの主要人物との交流からどんな影響を受けたのか、どういう生き方をしようと決めたのかに着目し、葛薇龍の人物像に再検討を加えることにしたい。

2 葛薇龍と使用人・睇睇と睨兒

葛薇龍は家族とともに戦火を逃れるため、上海から香港へやってきた。そして彼女は南英中学へ進む。しかし、葛家は家長である葛豫琨の貯蓄によって生計が成り立っており、物価上昇の打撃を受けて、香港での生活をこれ以上続けることが困難になった。ちょうどそのとき、時局が安定し、葛家は上海に戻るようになった。葛薇龍は翌年夏には南英中学を卒業できるため、学業を続けるため香港に残ることを希望する。そして経済的支援を得ようと、梁奥様の邸宅を訪問する。

梁奥様は葛豫琨の妹である。しかし、梁奥様が梁季騰の第四夫人になったことで二人の仲は陰悪になる。梁奥様の結婚以降、双方には往来がない。葛薇龍が梁奥様と初対面したとき、彼女は金目当てに来たのだと言われてしまう。あまりに直接的なことばに葛薇龍はひとり涙を流すのだった。

葛薇龍は梁奥様の良くない噂を聞いていた。会うまではそれはやっかみ半分のものだと考えていたが、会ってから噂は真実を反映したものだと思うようになる。梁奥様を目の当たりにして、葛薇龍は当初の計画（学費を援助してもらうこと）を再考する。

私が何のいわれなく泥水の中で生活するとしたら、女の子だから、黄河に飛び込んでも洗い清めることはできないのよ！私はやはり計画を白紙に戻して、もう一度考えなくては。しかし、こうやって来て、今日あ

れだけ侮辱されるのは、どうも納得できないわ！

侮辱され、計画を再考したにもかかわらず、梁奥様の庇護の下で暮らそうと決めるきっかけはいったい何だったのだろうか。筆者は葛薇龍と梁家で働く使用人との出会いに着目したい。

梁家には多くの使用人がいる。なかでもひととき目立つのが睥睨と睨児である。葛薇龍が梁奥様の邸宅に来てすぐに彼女はこの二人の使用人に適当にあしらわれてしまう。梁奥様にまくしたてられた時は睨児に助け舟を出してもらったが、それは一層彼女を気まずくさせるのでしかなかった。自分が親戚であるにもかかわらず、梁奥様に使用人よりも軽視されたことで体面を失ったからである。

その後、睥睨が梁奥様に男と密会したため罵られているのを聞く。

「奥様は誰に腹を立てているの？」ひとりが答えた、「叱られているのは睥睨よ。あなたがそんなにびっくりしてどうするのよ。」もうひとりが尋ねる、「どうしてばれてしまったのかしら。」ひとりは答える、「はっきりとは知らないわ。喬誠伯爵を招いてもだめだったので、調べてみると睥睨が彼にお供して何度か出かけたのよ、彼は願ったりかなったりで彼女と出かけたわ、そうすればもちろんわざわざここにやってきて密会することはないわよ。」彼女たちがひそひそ話しているのを、薇龍は少しばかり聞きつけたのだった。

睨児がやってくると、「葛薇龍は思わず身震いがした」。このとき葛薇龍は使用人が梁奥様に何を求められていたのかを悟ったに違いない。しかし、同時につぎのようにも考えた。

薇龍はこのように考えている、「わたしについては、目を見開いてこの陰気な世界に入りこんだ以上、もしたたりにでもあつたら、誰を責めたら

いいの。しかし、わたしたちはつまるところは叔母と姪の関係、彼女はメンツにこだわっているから、ただ私がしっかりとしていれば、おそらく彼女もそれなりに対応してくれるわ。」

ここから、葛薇龍には「叔母と姪の関係」を持ち出すことによって、自分と使用人とは違うという、いわば階層意識みたいなものが芽生えていることがわかる。

おりしも葛薇龍が邸宅に到着したその晩は、梁奥様との付き合いが久しい司徒協が汕頭に一時帰宅するため、送別会を開いていたところであった。司徒協が葛薇龍を見初めるのを心配した梁奥様は、睨兎に言いつけて彼女をさっさと部屋に案内させる。部屋のクローゼットには豪華な衣装が何着も掛っていた。ひととおり試着したあと、彼女は梁奥様のたくらみを悟る。

ひとりの女子学生がこんなにたくさん必要なのだろうか。薇龍は慌てて身にまとったイブニングドレスを脱ぎ、ベッドに放り出した。彼女はひざがカクンとなりベッドに座り込んだ。顔はだんだん火照ってきて、小さな声で言った、「これでは妓楼に買われた人と変わらないじゃないの。」

葛薇龍の思いとは裏腹に、梁奥様は彼女を使用人と同じ扱いしかしていなかった。このことを知っても、階下の送別会の賑わいを耳にするやひとり酔いしれる。

「見てみるのもいいわね。」

これが彼女の最後に出した結論だった。

二日目になると、葛薇龍は睨睨が梁奥様に反抗して追い出される様子を

目撃する。これによって、自分が歩もうとする道がどのようなものか自覚する。彼女はここで自分の将来像を睥睨に重ねていた。睥睨の結末は葛薇龍の先の見えない人生のひとつの解答である。

窓の外は長方形の芝生であり、きちんと整えられている。青緑色で、その緑がいささか傲慢である。一羽のスズメが、一步一步と八の字の足で試みに前に向かって歩いている。ある程度歩いたら、まるでこの愚かしい緑の大陸によって前がぼやけてしまったようだ。だが、また一步一步と戻ってしまう。

趙静氏は葛薇龍をこのスズメになぞらえた上で以下のように論じる。

薇龍が誘惑によって知らず知らずのうちに引き込まれていく魔性を秘めた世界そのものを象徴する。⁶

趙氏は足を踏み入れたことを「自分の居場所を誤った」行為だと捉えている。⁷なぜ「愚かしい緑の大陸」と知りつつも敢えてそこに身を投じた行為を「誤った」と判断しなくてはならないのだろうか。「見てみるものいいわね」の一言が表わしているように、少なくともこの時点において葛薇龍自身は「誤った」とは考えていないように思われる。

薇龍は突然〔睥睨が追い出される様子を一引用者注〕これ以上見たくなくなり、向きを変え、クローゼットを開けて、そこにもたれかけた。クローゼットの中は真っ暗で、ライラックの粉末がめまいを起こさせるくらいに匂っている。その中はやはり悠久の過去の空気だ、雅やかで、上品で、時間を気にしない。そこには窓の外の晴れ晴れとした朝は決して存在しない、あの平板な緑地、人を恐れる寂しげな顔、口元のピーナッツの皮……汚くて、複雑で、理屈で理解できない現実。

たしかに葛薇龍は「真っ暗」で「めまいを起こさせる」ような世界に身を投じようとしている。だが、それを「誤った」と断じるのはいささか短絡的だと思われる。葛薇龍は上海に戻ることに比べれば先の見えない道に進み、冒険をしたほうが自分の将来が開けると考えていたのではないだろうか。

3 葛薇龍と梁奥様

彼女が梁家へ住みはじめて三ヶ月あまりが経過し、ここでも生活にも慣れてきた。そして二人の男と出会う。盧兆麟とジョージ・喬である。

盧兆麟は葛薇龍のクラスメイトであり、聖歌隊の仲間でもある。いつからか葛薇龍は盧兆麟のことを好きになっていた。このことを梁奥様に内緒にしていたが、梁奥様はすでに察知していた。それどころか、盧兆麟を梁奥様のものにしようとして考えている。このことを葛薇龍は睥睨の口から知った。

薇龍は歯ざしりして言った、「あいつがもし彼女〔梁奥様のこと—引用者注〕の誘惑にたえられずに彼女の罠にはまったら、頼りにならない人だってことよ。私はとっくに彼のことを見抜いているわ。それでいいのよ。」

しかし、梁家で開かれたガーデンパーティで、盧兆麟が梁奥様と親しげに話しているのを見ると、先の冷静な態度とは異なり、感情的になってしまう。

薇龍は息をこらえきれなくなり、むせて目の周りが赤くなって、ひそかに罵った、「なんて馬鹿な奴なの。なんて馬鹿な奴なの。男ってみなあんなふうの間抜けなのかしらね。」

ちょうどこのときジョージ・喬と出会う。葛薇龍は梁奥様に盧兆麟を取られてしまった怒りもあり、ジョージ・喬に対してつぎのような印象を持った。

ジョージ・喬は彼女が知っている唯一梁奥様に反抗できる魅力的な人なのだ、彼女はこう考えると、ジョージ・喬にすこしは好感を持つのだった。

ジョージ・喬も自分が梁奥様をもてあそんでいることに対して得意げであった。

「君の叔母さんはめったに失敗などしないのに、俺に対しては、彼女は失敗した。今日、彼女がちょうどいい気になっているところに都合悪く俺に会ってしまい、あちこちで彼女の前の失敗を言挙げしたら、怒るのも無理はないな。」

このとき葛薇龍はジョージ・喬のことを心強い存在と感じたであろう。

一方、梁奥様はまだ盧兆麟の誘惑に成功していなかった。それゆえにパーティが終わってから葛薇龍に対して「親しげに気を遣った」。葛薇龍はここにおいて男を懸命になって追いかけている梁奥様のことを哀れみの対象として見るようになる。

「女って本当にかわいそうね。男がちょっといい顔したら、あんなに喜ぶんだから。」

そして盧兆麟を取られたことに対する怒りも収まってしまった。

「これはどういうこと。怒る理由があるのに、どうして少しも怒らない

の。昔の人は『じっと怒りを抑えて黙りこくる』と言うけれども、怒ることすらできなくなったの。』

葛薇龍が怒らないのも無理はない。ジョージ・喬との出会いによって、梁奥様にも弱みがあること、そして梁奥様が盧兆麟をまだわがものにしていないことを知り、そこから梁奥様に対する哀れみの感情が込み上げてきたからである。ここで葛薇龍は梁奥様が権力を握っていても、かならずしも男に関してはうまくいっていないことを知る。男をめぐる一連のできごとから梁奥様に対する見る目が、恨みの対象から哀れみの対象へと変化したと言えよう。これは葛薇龍の香港での生活に少なからず影響を与えたものと思われる。

4 葛薇龍と周吉婕

上海からやってきた葛薇龍の容姿には、香港人とは異なる中国情緒が現れている。

彼女の目は細く長い、二重まぶたはまなじりのところにまで及んでいる。やせこけた鼻に、ふっくらとした唇。彼女の顔の表情は少し欠如しており、しかし、まさにこの鈍さが、さらにおとなしく重厚な古き中国の情緒をかもし出す。

香港人を「豚の甘酢あんかけ」にたとえるならば、上海人の葛薇龍は「豚の蒸料理」である。これは香港で彼女の容姿が珍しいものであることを意味する。そしてこの珍しさは決して香港人にとっての珍しさとどまらない。香港を占領し、そこにある中国を「他者化」した西洋人にとっての珍しさでもある。「豚の甘酢あんかけ」に飽きた香港人のみならず、香港を占領した英国人にとっても彼女の容姿は人目を惹くものなのだ。中国にお

いて女性は長いこと搾取の対象であったが、そこに西洋という新たな支配者が加わることによって、中国の女性は二重に搾取の対象となった。この点において、葛薇龍を竹村和子氏の論じる「コロニアリズムとセクシズムが交わる地点にいる者、つまり（ネイティヴで女という）二重の「他者」として抑圧されている植民地の女」⁸として捉えることができよう。

つぎに周吉婕について見ていこう。いくつもの国の血統を持つ周吉婕は複雑な出自を持つ女である。

周吉婕はジョージ・喬とは異父同母兄妹の関係にある。周吉婕は義兄の彼を嫌っている。葛薇龍がその理由を問いただしても、彼女は「言うわけにはいかない、言うわけにはいかない」と言うだけでひた隠しにする。「雑種」（混血）の彼女は香港という地をたいそう嫌っている。

「私の考えは、遠くへ高飛びして、オーストラリアかホノルルで大学に進むことなの、香港にいるのはもううんざりだわ。」

その理由は彼女たち「雑種」の相手がおなじ「雑種」の男に限られるからだ。中国人とも白人ともうまくいかない。なぜなら白人は人種の観念が強く、たとえ本人が承知しても社会は承知しないからである。このように、周吉婕は自分の出自が「雑種」であることが、彼女の香港での居場所を無くしていると考えている。

「この植民地の雰囲気は強すぎるわ。場所を変えれば、人種の境界もこんなに厳しくはないはずでしょう。」

しかし、周吉婕と同じ「雑種」のジョージ・喬⁹はそんなことは考えていなかった。彼は義理の妹で周吉婕の姉でもある周吉妙や梁奥様を追いかけているだけである。周吉婕は「雑種」の「女」であるからこそ、香港で人種の壁にぶつかり、香港で生きることに困難を感じているのだ。男であ

るジョージ・喬はこうした悩みを抱くことはなかった。むしろ梁奥様をいらつかせるような余裕すら持っている。周吉婕はまさに二重に搾取される雑種であるがゆえに、搾取の可能性すらも奪われる存在である。彼女は主体（＝中国男性とその支配者である西洋男性）にはまったくアクセスすることのできない存在として自らを認識している。唯一残された可能性である「雑種」の男性との交際ですら、彼女は嫌がっているようだ。

「雑種の男たちは、せいぜい良くても、性格が陰鬱で、奴隷根性を持っているくらいだよ。」

濱田麻矢氏は「雑種」との結婚について、つぎのように論じる。

ただ一つの選択肢「雑種」と結婚することは、地域社会のよそ者として今うけている差別を受けつづけることを意味する。¹⁰

そして、周吉婕については「二重の他者」（中国人にも「持てる洋人」にも蔑まされる存在）であるとし、以下のような解釈をしている。

どうあがいても彼女は社会の他者であり、よそもの（アウトサイダー）である。彼女に向けられる性的な欲望は「他者」に対してのみ許される無責任なものでしかない。¹¹

筆者はこの濱田氏の論考を踏まえた上で、周吉婕とジョージ・喬との違いに着目する。ジョージ・喬は梁奥様やマリーン・趙を相手にするのに忙しくしているだけで、周吉婕のような悩みを抱えていない。少なくとも「男であること」「女であること」というジェンダーからくる悩みは彼にはないようである。¹²

また、彼女らがともに「社交界の花」であることも示唆的である。なぜ

なら「社交界の花」は男に「見られる」立場であり、「見る」男の権力の下に置かれる存在であるからだ。だが、それぞれに「見られる」立場は異なったものである。葛薇龍は上海人として、周吉婕は「雑種」として「見られて」いる。¹³

葛薇龍は「二重の他者」という共通点をもつ周吉婕と親しくなることで、女性の苦悩をわかちあうことができた。また「雑種」という新たな人種の存在を知ることもできた。周吉婕との出会いはジョージ・喬という「雑種」に対して抱いた感情にも影響を与えたと思われる。

5 葛薇龍とジョージ・喬

5・1 母性愛

3で述べたように、葛薇龍はジョージ・喬に好感を抱いていた。ところが、睨兎から彼には財産がないことを聞かされると、「ずっと冷淡になった」。

葛薇龍は財産を持たない男には用はないと考える一方で、さきのジョージ・喬との会話の中ではつぎのような反応を示している。

薇龍は突然、顔を赤らめ、うつむいてしまった。

この葛薇龍の身体的変化とさきの「冷淡になった」態度を比べてみると、葛薇龍のジョージ・喬に対する心情の自家撞着を窺うことができる。この自家撞着は金銭か愛かという二者択一からくるものであると思われる。

ある雨の晩、葛薇龍は梁奥様とその恋人・司徒協と車に乗って帰宅していたとき、ふとジョージ・喬のことを思い浮かべる。

薇龍は暑いのがいやで、体を前の座席の背もたれにやり、湿風に向っ

て、しばらく吹かれていた。体が疲れると、頭を腕にやった。この姿勢は、ふとジョージ・喬の特殊な習慣を思い出させた。彼はしばし頭を使うと、きまって顔を腕の中にうずめたがるのである。ひとしきり静かになると、頭をもたげて笑ってこう言うのだった、「そうだ、思い出したぞ！」あの子どものような表情は、薇龍にある種母性愛に近い反応を呼び起こした。彼女は彼の後頭部の短い髪のところへ、彼のまじめで一生懸命考えている顔へ、彼の袖がひじのところでしわを作っているところへキスをしたと思った。

彼女は、ジョージ・喬のしぐさによって自分の中に「母性愛」が引き起こされたことを自覚した。母性愛とは一般的に母親が子供に対していただく愛護の感情とされている。¹⁴しかし葛薇龍はそれを子供ではないジョージ・喬に対して抱くのだ。それは、ただジョージ・喬に対して親しみを持っただけでなく、わが子のように守ってあげたい、導いてあげたい存在であると感じたからであろう。そして母性愛から「キスをしたい」という情欲も引き起こされたのだ。

一方で、葛薇龍はつぎのようにも考えている。

彼女は今試みに自己の心理を分析してみた。彼女は どうしてこうもジョージを愛しているのかを知っている。こうして自虐的に彼を愛するのは、はじめは、当然彼の吸引力によるものであった。だがのちに彼が彼女を愛していないということが原因となった。ひょっとしたら、ジョージは過去の経験から、とっくにこの秘訣に気がついて理屈で説明できぬ女性の心を征服したのかもしれない。彼は彼女にやさしい言葉を投げかけたが、ついに彼が彼女を愛しているとは言わなかった。今、彼女はわかった、ジョージは彼女を愛しているのだと。もちろん、彼の愛と彼女の愛とは方法が異なってはいる——もちろん、彼が彼女を愛するのは一瞬だけである——しかし、彼女がこのように自虐的に身を処しているう

ちは、彼女は容易にそれで満足するのであった。

ここで葛薇龍の「自虐的に身を処しているうちは、彼女は容易にそれに満足する」という言葉に注目したい。葛薇龍は相手に愛してもらうことに満足するのではなく、自分が相手を愛することに満足している。すると、葛薇龍は盲目的にジョージ・喬を受け入れてしまうことになる。

ジョージは正しい、ジョージは永遠に正しい。

しかし、この時点で葛薇龍のジョージ・喬への思いはまだ揺らいでいた。揺らいでいたからこそ、このように自問自答し、なんとかジョージ・喬への愛情を保とうとしたのである。

5・2 無意識

ある日の晩、ジョージ・喬は睨児と偶然出くわし、誘惑する。その現場を葛薇龍は目撃した。翌朝、葛薇龍は睨児を見つけ出し、攻撃する。睨児は葛薇龍に同情し、甘んじて攻撃を受けようとする。

「好きにさせなさい。彼女も本当に気の毒な人なのだから。」

この睨児とジョージ・喬の密会は、葛薇龍にとってジョージ・喬への失望をもたらすものであり、加えて睨児というひとりの梁家に仕える使用人、つまり葛薇龍にとっては格下の女に敗北を喫したということにもなる。葛薇龍の自尊心はひどく傷つけられた。

このことを聞いた梁奥様は、せっかく手なずけた葛薇龍を手放したくないという思いから、ジョージ・喬と対策を講ずる。しかし、葛薇龍はすでに上海に帰ることを決意していた。ジョージ・喬は、梁奥様の葛薇龍の家

族が訴訟を起こすかもしれないという脅しにも平気で、むしろ葛薇龍と結婚してもよいというようなことをほのめかす。葛薇龍と結婚することで金銭面における利益の享受をもくろんでいたからだ。互いの利害が一致した二人は結託して、なんとか葛薇龍を引きとめようとする。

葛薇龍にとっては、上海の実家に戻れば、睇睇と同様の人生を歩むことになるかもしれない。あれだけ「新たな自由」を希望していた彼女がそれをあきらめ上海に戻ることを決意するくらい、ジョージ・喬と睇児との密会はショッキングなものであった。ショックから立ち直るには、彼との関係をきっぱり断って、ジョージ・喬のいない上海で人生をやりなおそうとするしかなかった。

「私は戻って、新たな人になりたい。」

「新たな自由」をあきらめ、「新たな人」へとなることを希望する。ところが、上海へ戻ろうとする矢先、彼女は病気になってしまう。

薇龍は突然疑問を抱いた。彼女の今回の病気は、ひょっとしたら半分は望んでいたものかもしれない。無意識裡に戻りたくないため、ひょっとしたらわざと延長しているのではないか…言うは易し、戻って新たな人となるなんてことは……新たな生命……彼女は現在のはかつてのように簡単に思考することはできなくなっていた。勉強して、社会に出て仕事をする、彼女のような美しくもなく、特殊技能を持たない子供の適当な活路があるとは思えない。彼女はやはり結婚するのがよい。

スーザン・ソントグはこのような「病い」の表象について、つぎのように論じている。

十九世紀になると、罪には罰が適しいように病気は患者の性格に適合す

るとの考え方は捨てられて、病気は性格を表明するという考え方によってゆく。病気は意志の産物とされるのである。〔中略〕病気においては、意志が肉体を通して語る。病気は内面的なものを劇化するための言葉であり、自己表現のひとつであるとされる。¹⁵

病気は道徳的性格に適合する罰であると考えのをやめて、内的自我の表出であるとするようになれば、道徳臭は弱くなると見えるだろうか。しかし、この考え方も従来のそれに劣らず、あるいはそれ以上に道徳絡みで、懲罰的色彩をおびているのである。近代以降の病気（昔の結核、今の癌）について言えば、病気は性格を表現するというロマン派的な観念は、どうしても拡大され、性格が——他に自己表現の場を持たなかった場合には——病気を引き起こすという主張に通じてしまう。情熱が内向化して、最奥の細胞を襲い、枯れ死させてしまうというのである。¹⁶

葛薇龍の「病い」も自己の内面を表出するものとして作用しているが、それは葛薇龍自身にとっては意外なものであり、恐怖すら引き起こしてしまう。

彼女はジョージがただのごく普通のごろつきでしかないことを知っているのだから、何を恐れることもないのであるが、しかし怖いのは彼が引き起こす彼女の理屈で説明できぬ暴力的な情熱である。

この「理屈で説明できぬ暴力的な情熱」こそ愛情の有するほんらいの姿であろう。なにかのきっかけで交流の始まった二人が、些細なできごとのくり返し、積み重ねによって、一方が（あるいは双方が）いつしか相手に他人とは違った感情を抱くようになる。

葛薇龍はジョージ・喬に対して「母性愛」を抱き、また「無意識」のレベルでもジョージ・喬を愛していることに気がついた。ジョージ・喬と睨

児との密会は、葛薇龍にとってはジョージ・喬に失望するどころか、かえってジョージ・喬への愛を知るきっかけになってしまったのだ。葛薇龍にとって「ジョージ・喬のために金を工面するのであれば、梁奥様のために人をもてあそぶ」ことはジョージ・喬への愛情を満たす手段にすぎなかった。それは何よりも「理屈で説明できぬ暴力的な情熱」を優先させた結果だと言えよう。

6 さいごに

竹村和子氏はつぎのように言う。

リビドー＝欲望に形式をあたえる言語は、個人が無から創案するものではなく、広く文化が、それを用意する。他方でわたしたちは、すべて同じ対象に、同じ方法で、同じ強度で、リビドーを備給しているわけではない。わたしたちは、獲得した言語を組み合わせ、意図的・無意図的に選択し、選択させられ、あるいは言語のすきまさえもぬいながら、〈わたし〉の欲望をこしらえあげる。¹⁷

葛薇龍の情欲、愛情も「獲得した言語を組み合わせ、意図的・無意図的に選択」して生まれたものである。

使用人との交流でこれまでとは違った世界で生きることを決め、梁奥様と周吉婕との交流でジョージ・喬と出会い、彼に対して好感を持つようになり、そして、ジョージ・喬との交流でこれまでになかった情欲、愛情を感じるようになった。

迅雨（傅雷）は「論張愛玲的小説」において、短編小説「金鎖記」の曹七巧における女の「情欲（passion）」の存在を明らかにした。¹⁸この評論は曹七巧の人物像をめぐって、のちのフェミニズム批評からの批判を受けることになる。¹⁹しかし、張愛玲文学における「情欲」を発見したことは炯

眼だと言えよう。

本稿では葛薇龍に対しても「情欲」の存在を指摘した。そして、自らの情欲、愛情に素直に生きる葛薇龍を、主体性を持った女性として解釈する。先行研究では「墮落」だの「父権制に対する反逆・復讐」だのと葛薇龍を既存の社会秩序とは相容れない異端として捉えがちである。しかし、情欲や愛情とはそもそも既存の社会秩序ではコントロールしえないものであり、誰にでも起こりうるものである。「沈香屑 第一炉香」はまさにこのことをわれわれに示しているのではないだろうか。

注

1 底本は『傾城之恋』（張愛玲全集）、止庵主編、北京十月文芸出版社、2009年所収を使用する。

2 周瘦鵬「写在《紫羅蘭》前頭」、『紫羅蘭』第2期、1943年5月。引用は『張愛玲的風氣—1949年前張愛玲評説』、陳子善編、山東画報出版社、2004年による。

3 たとえば、水晶「“炉香” 梟梟 “仕女図” —比較分析張愛玲和亨利・詹姆斯的兩篇小説」、『替張愛玲補粧』、山東画報出版社、2004年は「小事において賢く、大事において愚かな女子である葛薇龍は、叔母の梁奥様と夫ジョージ・喬に利用されて、しだいに墮落と破滅の過程をたどる」とし、許子東「一個故事的三個講法」、『呐喊与流言』、上海文芸出版社、2004年は「〔曹禺『日出』、張恨水『啼笑因縁』、張愛玲『沈香屑 第一炉香』の三作品は—引用者注〕いずれもひとりの女がいかに金銭、虚栄を貪り墮落に陥るかという物語である」とする。

4 林幸謙「三 「沈香屑」 論述：第一炉香和第二炉香的女性寓言」、『張愛玲論述 女性主体与去勢模擬書写』、洪葉文化、2000年。

5 邵迎建「第三章 『伝奇』の世界（一）」、『伝奇文学と流言人生』、御茶ノ水書房、2002年は「自分の意志で否定的なアイデンティティを選んだ薇龍は、幸福どころか絶望に陥ったのである」とする。また、濱田麻矢「生家を出た娘たち—民国期の恋愛小説を読む」、『ジェンダーからみた中国の家と女』、関西中国女性史研究会編、東方書店、2004年は「誰に責任を問うこともできない自由結婚によって、彼女は自分自身を滅ぼしたのだ」とする。

6 趙静「張愛玲の描く「緑」の心象性—『沈香屑—第一炉香』と『金鎖記』を中

心に」、『日本アジア言語文化研究』第5号、大阪教育大学、1998年。

⁷ 趙静「張愛玲の描く「緑」の心象性—『沈香屑—第一炉香』と『金鎖記』を中心に」、前掲。

⁸ 竹村和子「責任あるエイジェンシー——ポストモダニズム、ポストコロニアリズム、フェミニズム」、山形和美編『差異と同一化』、研究社出版、1997年。竹村氏は、このような植民地の女をスピヴァックやトリン・ミンハを引きつつ「責任あるエイジェンシー」と呼び、しかし「何か一つの立場を代弁するということではない」ものだと論じる。

⁹ ジョージ・喬が「雑種」であるということは、梁奥様の「おまえの母親はどこから来たともしれないポルトガルの売女でマカオの賭博場で遊んでいたくせに。」という言葉からわかる。

¹⁰ 濱田麻矢「『洋場』の「洋人」—張愛玲小説の外国人」、『中国文学報』第54冊、1997年。

¹¹ 濱田麻矢「『洋場』の「洋人」—張愛玲小説の外国人」、前掲。

¹² 林幸謙「三 「沈香屑」論述：第一炉香和第二炉香の女性寓言」、『張愛玲論述 女性主体と去勢模倣書写』、前掲は、ジョージ・喬について、つぎのように論じている。

「ジョージの役割は、文字どおり父系文化の規範における去勢された自我を演じており、名実ともに空洞的なシニフィアンである。女性に元来付与された抑圧という記号は、ここではジョージに転移されている。伝統的な女性の、性、貞節と欲望における禁忌は、売春で夫を養うことによって打破され、父権制の象徴的秩序に動揺をもたらす。」

¹³ 森村泰昌「千野香織のまなざしについて」、『大航海』43号、講談社、2002年はつぎのように述べる。

「〔「見る」ことによる支配と「見られる」ことによる被支配による—引用者注〕「視線」の力学をもっとも端的に示すのが、オトコとオンナの関係である。オトコは「見る」ことによって欲望を満足させる。オンナは「見られる」ことによって欲望の支配下に置かれる。」

¹⁴ 「母性」という語について、『現代漢語大詞典』、漢語大詞典出版社、2000年では「母親が子を愛護する本能」とする。また、『日本国語大辞典 第二版』、小学館、2000-02年では「女性が母親として持つ性質。子どもを守り育てようとする母親の本能的な性質」とする。なお、「母性愛」について、『日本国語大辞典 第二版』では「母親が子どもに対して持つ愛情。生活力の未発達乳幼児に対して

